

ソクラテスの倫理・教育思想

—古代ギリシアの倫理思想—

A study of Ethics and Education of Socrates

—Ethics in Ancient Greece—

和田正美*

Masami WADA

抄録

本稿は、大学での講義「西洋教育史」に使用する教科書を作ることを想定して作成したものである。教育思想を正しく深く理解するには、歴史、文化を十分理解していなければならない。大学は学問の場であるかぎり、幅広い領域の知識を統合化する教育が必要であることは言うまでもない。しかし現在、大学の講義内容に相応しい教科書は皆無といってよい。専門書は豊富にあるが、大学の講義を想定しては書かれていないのである。

ソクラテスの時代の倫理・教育思想は、決して突然に生まれ出たものではない。その背景となり、推進力となったものとして、自然哲学者たちの思想、ギリシア悲劇、自然中心主義から人間中心主義への転換をはかったソフィストたちの思想などを挙げるができる。

よって、本稿は、ギリシア神話、伝説などを扱うギリシア悲劇、自然哲学者たち、ソフィストたち、そして、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの三大哲学者の倫理思想を考察することにより、古代ギリシアの倫理思想を概観する。

Abstract

The first purpose of this study is to make a survey of the history of ancient Greece at basic point of democracy. The second purpose is to make a schoolbook on "European educational history". We need to understand the culture and the history of the times to understand their educational thoughts. To understand the democracy in ancient Greece is one of the ways to understand the ethics and the education of Socrates. In this paper I outline the ethics in ancient Greece from the Greek tragedy, the thoughts of Sophists and the ethics of Socrates, Plato, Aristotle and so on.

* 関西国際大学人間科学部

1. はじめに

倫理学は、客観的・統計的なものではなく、主観的・自省的なもの、それは、「人間」とか、その生活共同体のルールというような、一見漠然としたものを対象としている。

古代ギリシアのソクラテス、ユダヤ教やキリスト教、東洋の仏教や儒学のような、何千年もの歴史をもった洋の東西の哲学や宗教と結びついて、その各々の伝統と歴史を集積しながら、倫理学は今日に至っている。

古代ギリシア思想の中で、中心的位置を占めるものは、「知恵の探求、知恵の重視」ということであった。そして、次には、人間としての最善の生き方（倫理）を常に求めてやまなかったことがあげられる。

古代ギリシアの倫理思想を生み出したのは、力強い文化の源泉であり、推進力であったギリシア精神であった。このギリシア精神が、ソクラテスを出発点に、人間の本性、とくに、理性を中心に、人間の生き方を、自覚的に、理論的に、学問的に問題にさせ、ついに、倫理学を誕生させるに至った。

本稿は、西洋倫理思想の開祖といわれるソクラテスの倫理思想がどのようにして生まれ、その倫理思想がどのようなものであったか、また、その後のプラトン、アリストテレスについても考察し、古代ギリシア時代の倫理思想を概観する。

2. 西洋古代の倫理思想

一般に、西洋の倫理学は前5世紀に、ソクラテス（前470または前469～前399）によって始められたと言われている。ソクラテスを中心に、西洋古代の倫理思想を概観すれば、ソクラテス以前の倫理的思考、三大哲人（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）の倫理思想、および、ヘレニズム・ローマの倫理思想の三つに大別することができる。

ソクラテスは、「知行合一」、「知徳合一」を説いて、ものごとの本性をよく知ることが、同時に道徳の実践にもつながり、幸福にもつながると説いたことから、倫理学が生まれてきたとされている。倫理学を誕生させるに至るためには、そこにはそれなりの歴史的ないし社会的背景がある。それは、以下の内容であると考えられる。

2.1 ソクラテス以前の倫理的思考

古代ギリシアでは、前8世紀にはホメロスの二大叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』や、ヘシオドスの叙事詩『仕事と日』『神統記』などが栄え、前7世紀にはサッフォーなどの抒情詩が全盛を来した。

そして、前6世紀頃には、神話的世界観から合理的精神（客観的に認識）による神話批判、因習批判が行われるようになり、哲学が始まった。タレスなどの自然哲学者が出て、「万物をしてそのようにせしめる根本、始源（アルケー）は何か」を問うことが、自然哲学者の中心課題であり、この問いに対して、水や火などの自然物を解答として示した。ソロン、タレスなどの七賢人の言葉が、格言として人々の心に刻まれ受け継がれていった。

前6世紀～5世紀にはギリシア悲劇が全盛を来すようになった。また、ソフィストたちの倫理

についての啓蒙的思想などが現れた。

ソクラテスの倫理思想の誕生には、その背景となり、推進力となったものとして、少なくとも、上記のことが考えられる。

2.1.1 ホメロスの詩人的倫理観

ギリシア史以前の戦争を素材にした前8世紀頃のホメロスの詩編は、ギリシア人の心の拠り所である神々や英雄達が描かれ、特に英雄達の言動は、後人を教育するものとして、その暗誦がよるこばれ、倫理生活を支えるものであった。

ギリシア人にとって、最も大切な徳である正義や友情や勇気や知恵や貞操などを、英雄、知将などの行動を通して展開し、さらに、ギリシア精神を貫く主知主義を予言するかのよう、武勇よりも知略、明知を高く評価し、知恵は勇気にまさり、理論は実践に導くべきものであることを謳っている。ホメロスの叙事詩は、祖国愛を強調し、ポリス市民の倫理的感情に強く訴え、ソクラテス以前の倫理生活の支柱をなした。

2.1.2 自然哲学者たちの倫理的思考

ポリスは、古い氏族形態から脱皮して、ポリス市民としての枠内で、平等と自由が自覚され、古代民主政が基礎づけられるに至った。

自然哲学者たちは、人間を含めた自然（フュシス）を対象に、万物がそこから生成し、そこへ帰っていくところの、宇宙全体のもとのもの（アルケー）を追求する眼は、人間社会の構造の原理、人間の存在を通じての存在の原理、すなわち、倫理に関する規範的なことを問題にするに至っている。

しかし、彼らは、人間のこと、人生のこと、つまり、倫理のことを、直接、問題にしなかった。倫理についての理論的反省を一步前進させたのは、次に登場するソフィストたちである。以下、自然哲学者たちを取り上げ、各自の倫理的思考を考察する。

(1) ヘラクレイトス（前535頃～前475頃）

「万物は流転する」と唱えたヘラクレイトスは、永遠に生ける火をアルケーとみなした。火の転化によって、空気、水、土が生じ、それらから万物は生じるのである。また、生成流転が世界の実相であるとした（万物流転）。しかし、変化流転が世界の真相であるが、この生成は相互に転化しあう相対立するものの、緊張的調和によって世界を秩序づける永遠不変の法則、すなわち、世界理性（ロゴス、logos）があると考えた。ロゴスは、理性、法則等を意味する言葉であるが、世界の変化、運動の中に一定の法則が働いており、この法則に従って万物は生じ、運動しているというのである。

魂が乾燥した状態、すなわち、知恵を身に着けて、節制を守っているとき、それは、理性的で、最も賢明な、美しい魂であり、ロゴスに耳を傾け、これを洞見し、これに従うことができる。彼は、人は感覚や主観によってではなく、乾燥した魂のもつ知恵と、節制によって、ロゴスに従って生きるとき、そこに、はじめて、真の満足が得られるとし、これを徳とした。

彼は、伝承的な道徳を排して、理性的な生き方を強調し、ロゴスを求めて、一つのポリス・民族を超えた倫理観に立っている。彼の倫理観はソクラテスの倫理思想の先駆をなしたと考える。

(2) ピュタゴラス（前570頃～前495頃）

ピュタゴラスは、万物のアレテーは数であるという原理を行為の世界に拡大・適用しようとした。世界は数によって形成され、万物の現象は、すべて数の均衡と調和から成り立っていると

た。たとえば、正義の徳は平行線であって、それは、「報い」が行為に正確に均合った状態を表わす数であるとした。したがって、ピュタゴラスの数学の研究は、徳の本質を知らしめ、魂の浄化に至らしめるものであった。

不死であり、神的である魂が、人間の肉体に宿ることによって、罪を犯し、罰を受くべきものとなった。それ故、肉体は罪惡の根源であり、魂を閉じ込め、牢獄であり、墓である。魂は不死不滅で、人間ばかりでなく、新しい肉体を求めて、他の動物にも宿り、何度も生まれ変わる、輪廻転生するものであると、ピュタゴラスは言う。それ故、肉食すべきものではないとした。

さらに、世界は人間も動物も包括的な共同体であるという倫理観に立つと同時に、罪惡の根源である肉体という牢獄に閉じ込められている人間は、その運命の輪から逃がれて、浄福を得るためには、志を同じくするものが、厳格な教団生活を営み、神に従い、両親に服従し、厳しい自制と、友人に対する献身、誠実などの諸徳を実行することによって、魂の浄化をはかり、魂が肉体から解散され、神人合一の安らかな境地に至らなければならない、とした。

(3) デモクリトス (前460頃～前370頃)

デモクリトスは、この世にあるものは、アトムと空虚だけであるとして、魂までも物質的なものであるとした唯物論者である。

魂に関わる認識を感覚によるものと、思惟によるものに分け、思惟による理性的認識こそ、永久的、究極的な、純正な認識であるとした。この認識によって得られる究極の善は、心の朗悦であり、それが幸福であり、人生の終局の目的であるとした。朗悦は、快樂の適度と、生活の均衡のとれた中に生ずるものであった。それは、心の安静不動を意味する。

しかも、このような生活理想は、節制、適度、生活の均衡、自足、思慮分別、さらに、勇氣、雅量、調和、正義などによって達せられるものであった。デモクリトスの幸福は、魂のものであり、理性的認識によって得られるものであった。

2.1.3 ギリシア悲劇

ギリシア悲劇は、もともと葡萄の収穫の季節に豊かな穀物をもたらした酒の神であるディオニュソスを讃える祭礼から始まったものであった。それは、前7世紀ごろまでは、農民たちが飲み、歌い、踊りながら、夜通しディオニュソスを讃え、来年の穀物の豊饒を祈るものであった。

しかし、前6世紀も後半になるにつれて、農民の大半は見物席に退き、かれらの代表が舞台上がって劇を上演するという形に変わり、三大悲劇詩人（アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス）などの作品が選ばれて数々の悲劇が上映されるようになった。

たとえば、ソフォクレスの『オイディプス王』『アンティゴネ』は、以下のような内容である。子（オイディプス）が知らずに実の父を殺し、生母を妻とする。ついには、不義の子が生まれ、それを知った母は即座に自殺する。知らずして、父を殺し、実の母と結婚したテバイの王オイディプスは、剣で両眼をえぐり盲目となり、乞食となってギリシア全土の放浪の旅に出て、やがて寿命尽きて死んでゆく。その間に長男と次男の不義の子たちは、王位継承をめぐる争い、お互いに相討ちして死んでしまう。また、神々の掟を守ろうとする不義の娘（アンティゴネ）が、国禁を犯して反逆者である不義の兄の葬礼を行おうとして、国の掟を守ろうとする伯父と争うが、石牢に幽閉され最後には自殺して果てる。

当時、アクロポリスの丘で上演されるディオニュソス祭に参加することは、すべてのポリス市民の宗教的義務であった。生まれてくるすべての者が、苦しみに満ちた没落を覚悟しなければな

らないことを思い知るという深刻な、神と人との対立を明示する『オイディプス王』、人と人との対立を示す『アンティゴネ』のような悲劇が、全市民を前にして、堂々と正面きって公開されたのである。

英雄ですらもこの世の掟の下には、はかなくも消え去る。人間の幸福というものはまことに不安定なものであり、人間とは常に対立し合う可能性をふくんだものである。ここに神々の掟、つまり運命と人間の掟、普遍的なもの（運命）と個別的なもの（人間）との根本的な対立が厳然と見出される。

2.2 ソフィストたちの啓蒙的倫理思想

2.2.1 ソフィストたち

紀元前5世紀、アテネで民主政治が盛んになると、ソフィストと自称する弁論術を教授することによって謝金を受けとる職業教師たちが登場し、ギリシア各地で活躍した。従来の政治体制とは異なり、家柄でも、財産の多寡に関係なく、言論を支配する者こそが国政に参画することができた。政治的野望を抱くポリス市民の青年たちは、討論に勝つための弁論術が必要となったためである。

ソフィストとは、元来、賢者、知者、一芸に傑出した人物を意味するものであった。彼らは、ギリシアの主要都市を遍歴し、講演を試み、自然界に関する、あるいは、人間界に関する新奇な学説や知識を授けたが、重視したのは政治的教育、特に修辞弁論の術であった。民主社会の政治活動にとって必要な政治の術や法廷弁論などを教えた。しかし、ソクラテスにとって、神のみが智者なのであり、人間に許されているのは、到達不可能な目標としての知恵を愛し求めていくこと、つまり、愛知者の立場を持していくことであった。

ソフィストたちの出現と相まって、「徳」は教育によって人に授けることのできるものであるかどうかという問題が、ギリシアの人々の切実な関心となっていた。

ソフィストたちは、たとえば、市民としての優秀性の一つ、つまり市民的な徳として弁論術を教えた。ソフィストたちにとって、当然、徳は知識でなければならない、また伝達可能なものでなければならない。さらに、徳が教授可能であるためには、それが人間に本性上備わっているものではなく、後天的に獲得されるものでなければならない。

ソフィストたちは、「人為（ノモス）」と「本性（ピュシス）」の両者を区別し、ピュシスを否定して物事をみようとした。すべてのものを人為的なものと考えようとするのである。当時の民主的な風潮に乗るものであり、伝統なり、在来の諸制度の否定にもつながる恐れがあった。

このようにして、ソフィストたちの探求の対象は、自然のことから、人間自身のことに移るに至ったのである。徳（アレテー）の意味を人間に対してのみ適用し限定したのは、歴史的には、ソクラテスよりも、むしろソフィストたちであった。

補説：ノモスとピュシス

自然哲学の主題としてのピュシスから、ソフィストの社会批判の主題としてのノモスへの変遷が、初期古代ギリシア哲学を特徴づける。

ノモス：掟・慣習・法律の意であり、社会制度・道徳・宗教上の規定を指す古代ギリシアの観念。ソフィストはこれを自然（ピュシス）と対立させ、その権威を相対的なものとした。

ピュシス：古代ギリシア初期の哲学者たちが、伝説・伝承の世界観を脱却し、もののありのまま

まの真実を記述し、その変化を通じて支配する根源を探求したとき、それをこの名で呼んだ。自然のほか、宇宙・本性・性質なども意味する。

代表的なソフィストたちには、ソフィストの最初の人と言われ、最年長で最も有名な相対主義者のプロタゴラス（前490年頃～前420頃）、ものの認識の困難さを主張し全てを疑ってかかる懐疑論者のゴルギアス、ノモス（慣習・法律など）を反自然だとしたヒッピアス、生物学的強者の自然権を主張したカリクレスなどがある。ソフィストと自称したプロタゴラスを取り上げ、ソフィストの特徴について考察する。

2.2.2 プロタゴラスの相対主義・主観主義

プロタゴラスの有名な命題の一つに、「人間は万物の尺度である。すなわち、そうあるものどもについては、そうあるということの、そうあらぬものどもについては、そうあらぬということの」と述べて、人間尺度説を唱えた。

また、プロタゴラスの主張として伝えられている「各人の感覚は、いつもそれぞれの場合において真である」（プラトン著『テアイテトス』）と、各々の事柄は、各人に現れるとおりに存在すると言って、あらゆる判断の基準になるものは、各個人であり、しかも感覚であり、判断は各人各様であるとした。この命題は、この世界に、客観的にして普遍的に通用する標準、永遠的な真理を認めない相対主義、主観主義を表わしている。

プロタゴラスは、現象をとらえる各人の感覚を一切の判断の基準と考えようとした。この点において、「アイデア」（エイダスともいい、理想と訳されることもある。諸々の物質や価値などの原型、原理、根拠、真の实在、万物をしてそのようにあらしめているもの）の存在を考え、感覚とそれに基づく判断を虚妄として退けようとしたソクラテス・プラトンの立場と、著しく対照をなした。

他人の判断を誤りとして批判することはできない。また、同一人の同一物に対する判断でも、状況が異なれば、異なった判断が生じてくることになる。自己の主張は、常に、永遠に真理であることができないのである。さらに、各人の感覚を判断の基準とする限り、ものの性質は、本性上のものではないことになる。

判断は、善とか正といったことではなく、各人がその時々にもつ目的に適合しているかいないかという、実用的な観点が基準となり、「より善い」ということは言えても、「真」であるとか、「正しい」ということは、言えなくなってくる。それ故、プロタゴラスは、「無力なる議論を有力なる議論とする」弁論術を編み出し、これを教授した。

しかし、プロタゴラスは国家社会の基礎（法律、制度、慣習的倫理などのノモス）の破壊を目的としたものではない。それは、自分に真と見え、善と見えるものを他人にもそう思わせる弁論上の技巧以上には出なかったのである。ノモスを破壊し、否定するに至ったのは、彼の影響を受けた前4世紀後半のソフィストたちであった。

ソクラテスは、プロタゴラスのこの倫理的主観主義の克服をしようとしたのであった。

3. ソクラテス、プラトン、アリストテレスの倫理思想

アリストテレス（前384～前322）は、『ニコマコス倫理学』において、倫理学を「善とはなにか」、また「善はどのようにして認識されるか」を研究する学問だといっている。また、さら

に、「人間にとっての善」、つまり「幸福」を追求するものとして規定されている。

当時のギリシア人にとって、学問とは、永遠不変、かつ普遍的なもの（ギリシア人は「神的なもの」と叫ぶ）を対象とするものであった。古代のギリシア人が倫理学をどのように考え、またどこにその学問性を求めたか、そこで、三大哲学者といわれる、ソクラテス、プラトン、アリストテレスのそれぞれの考え方を以下に取り上げる。

3.1 ソクラテス

3.1.1 ソクラテスと「汝自身を知れ」

古代ギリシアの倫理観は、ポリス市民が観ることを宗教的な義務とされたギリシア悲劇を背景として生まれたものであると考えられる。市民としてささやかな幸福を得るためには、いったいどうしたらよいのか、という問題意識をもつようになったのである。

こうした背景の中から「汝自身を知れ」という言葉が生まれた。古代ギリシアのすべてのポリス市民の信仰的であり、最高の権威のあったデルフィのアポロン神殿に、骸骨の絵とともに、「汝自身を知れ」と書かれた額が掲げられてあった、と伝えられている。この「汝自身を知れ」というのは、人間は神のように不死ではなく、過度を慎め、人間の運命はいつ逆転するかわからない危険な状態にあり、人間は常に脆く危なっかしい運命を歩んでいるのだ、と訴えた言葉である。

ソクラテスは、この「汝自身を知れ」という言葉を、人間の魂の問題へと目を向け、人間にとって善美なること、すなわち魂を善くすることについて、自らアテネの市民たちとアゴラ（市場）で問答を重ねた。自分自身を知り、無知の自覚の上に立ってはじめて、ものごとを本当によく知ることができ、そこから善く行う道が自覚され、人間の道徳につながるのだと主張した。

「汝自身を知れ」という言葉を背景にして、彼独自の倫理学の出発点となる「無知の知」（美しい善いこと、すなわち、人間として、市民としての徳とはいかなるものかについて、無知であることを知ること）へとなり、そして、ソクラテスの倫理思想が生まれ、また、「過度を慎め」はアリストテレスの「中庸の徳」へとつながると考える。

一方、中国の四書の一つである「大学」に、「修身齊家治国平天下」というのがある。これは、天下を治めるためには、まず自分の身を修め、次に家庭を平和にし、次に国を治めれば、天下、つまり世界は平和になる、という意味であり、この順序に従わなければならない。これが儒教思想の根幹をなし、個人、家、国、世界というように、人間とその所属する社会集団の中を次々と連続線を追って拡大していき、その連続線のうえに倫理の展開を考えたのである。

このように、孔子や孟子に代表される東洋の倫理観は連続の思想をその背景にもっているのに対して、ソクラテスに始まる西洋の倫理観は、断絶の思想をその背景にもっていると考えられる。人と人とを「相對」すなわち対立関係において捉える西洋倫理に対して、東洋倫理の特色は人と人とが助け合うことにあると考えられる。

3.1.2 ソクラテスとデルフィの神託

ソクラテスは自分の思想を文字の形で残してはいない。ソクラテスの思想は、主として弟子プラトン（前427～前347）の対話諸編に登場するソクラテスの発言や、またプラトンの弟子アリストテレス（前384～前322）、その他の後代の報告を手がかりとして再構成するほかない。

ソクラテスは、ものについて普遍的な定義をすることを追求し、またその際、帰納的論証が用いられ、それによって普遍的な定義が追求された対象は、自然の究極的な原理といったものでは

なく、倫理的問題に対してであった。人間、ことに人間の徳の問題に対してであった。

デルフィでの「ソクラテス以上の智者は一人もない」という神託の言葉の真偽の探求から、「無知の知」に気づいたソクラテスは、神こそが唯一の真の智者であって、人間は知っていると思ひ込んでいるにすぎない。人間のなすべきことは、無知を知ることと知恵の愛求である。知恵については、人間はもっと謙虚でなければならないとの結論に達し、このことはまた、デルフィのアポロン神殿の額に掲げてあったといわれる「汝自身を知れ」という言葉ともつながっている。

ソクラテスは、「無知の知」というのは、一般的なことがらについての無知ではなく、人間の内にある、「人間の本質をなすもの」「善美のことがら」についての無知、人間として善く生きること、美しく生きることについての無知が問題であったのである。

3.1.3 魂への配慮

「無知の知」から真の知へ自分を高めていくことをソクラテスは重視した。その真の知に至る過程のことを「知を愛し求めること」つまり哲学と呼んだ。ソクラテスにとって哲学とは、「善美のことがら」について知る過程のことを指したのである。善美についての知識を得ることは、魂を配慮・世話することによって得られるものであり、それは、同時に、人間として、市民としての徳とは何であるかを知ることになる。この意味で、ソクラテスにおいて、徳は知恵であり、思慮であり、知識でなければならないことになる。

『ソクラテスの弁明』の中で、われわれの本質かつ真の自己である魂に注意と関心を向けて、有徳な人になるように、魂を配慮し世話し、出来得るかぎり魂をよく育ちあげ、理性的基礎の上に立って、神の信仰と道徳とを確立し、浄化し、幸福な生活をもたらすように、また、それより以前に名誉、地位、財産といったその人に付属するものに対して配慮をすべきでない、とソクラテスは述べている。ソクラテスは、「アレテー」を魂の善さとして考えている。つまり魂をできるだけ善くするということは、徳を磨くことであり、徳に配慮せよということになるのである。

3.1.4 徳について

プラトンの初期対話篇の一つである『メノン ー徳についてー』において、「徳は教えられうるか」というメノンの問いに対して、ソクラテスによって、「徳とはそもそも何であるか」という「徳」の定義への試みははじまる。対話をとおして「徳」を追求するソクラテスが描かれている。

古代ギリシアにおいては、徳の原語「アレテー」とは、元来、広くそれぞれがもっている、ものの善さ・卓越性・優秀性・能力を意味し、なにも人間固有の事柄ではなかった。

徳を人間の固有なものとみなし、この問題に対し帰納法（個々の具体例から出発し、普遍的なものに至ろうとする手法）を適用したということは、ソクラテスは自然科学の方法を導入することにより、倫理学の端緒を開いたといえるであろう。

何が人間の卓越性であり、何が優れているとみなされるかは、それぞれの時代と社会の在り方によって異なるであろう。ホメロスの物語の世界では、武将や王として強く手腕があることや、高貴の生まれであることが「アレテー」であったが、前5世紀のポリス社会においては、「アレテー」とは「国家社会の一員としての」という限定がつくような、国家有数の人物であるための政治的・社会的能力を意味していたと一般的に考察されている。

しかし、ソクラテスによって、人間の問題、徳の問題における普遍性の追求ということによって、倫理学はその学問性（哲学性）をあたえられたといえる。あくまでも人間の問題に核心をおき、そこに普遍性を求めたところに、ソクラテスの特徴があったと考える。

3.1.5 ソクラテスの普遍的倫理

ソクラテスもソフィストも、「アレテー」を人間的意味に限定し、さらにそれを一種の知識としてとらえる点においては共通している。

「誰もみずからすすんで悪を犯すものはない」という命題が、ソクラテスの主張として伝えられている。これは、悪を犯すのはその無知に由来するのであり、徳と知とは同次元においてとらえようとするソクラテスの立場を示していると言える。ただし、ソクラテスは、ソフィストのように、徳を、個別的に、また実用的見地から、いわば一種の技術としてとらえるのではなく、それを「魂」(心)に属するものとして内面化・深化し、さらに、その普遍的定義を追求しているのであって、そこにソフィストとの差異がみられる。

ソクラテスはソフィストを厳しく批判しているが、ソフィストは、それまでの自然哲学が自然の探求に向かっていたのに対し、ソクラテスの人間の探求(人間中心主義の考え方)への橋渡しを演じた点で重要である。

「徳は知である」といっても、その際、「知とは」、「善は何であるか」(善の普遍的定義)についての「知」が意味されているのであって、この知の内に他のすべての徳が包括されていると、ソクラテスは考えたのである。人間にとっての大切な事柄(魂の善さ、徳など)について人々の無知を指摘した。人間として善く生きること、美しく生きることについての無知が問題であったのである。

人間は、大切な事柄について知ることができるということ、つまり徳を知ることができる(「知徳合一」)、正しい生き方は知ることができるということをソクラテスは主張した。正しく知り得たことは、正しい行いにつながらねばならず(「知行合一」)、この行為においては人間の意志がはたしている(「主意主義」)。ソクラテスの知徳合一説は、意志のはたらきが軽視され、知性のはたらきを重視する単なる主知主義ではないと言えよう。

倫理学の目的は人間を幸福にするような善の追求にあるとみた場合、その直接の対象となり、手がかりとなるのは、個々人の行為である。ソクラテスは、実践的知恵、つまり「善く生きること」を知ろうと努め、また、その実践を自ら行うことで、人間としての生き方の普遍性を追求した。

「善く生きること」は、道徳の問題であり、倫理的課題である。ソクラテスは、「善く生きることと、美しく生きることと、正しく生きることとは同じだ。…」と言う。「善く生きること」は、思索のみの生活ではなく、魂への配慮、徳の配慮をする生活である。徳があるかないかが問題なのではなくて、徳にもとづく行動ができるか否かが問題であったと考える。

このようにソクラテスは、徳は知識であるとして、これを教えることが可能であるとした。何が善いかを知らずして善いことを行うことはできず、また、あることが善いと知れば必ず実行するものである、という考えであった。本当の知識は理性によって得られるとし、また、正しい知識が、そのまま徳となり、正しい行為をもたらすと考えた。こうして、ソクラテスは、「知行合一」「知徳合一」を説いたのであった。

ここで要求される知識は、客観的な知識にとどまっただけではなく、現実の場面において、一つ一つの生きた問題に対処して自主的に正しい判断が下されるような知識でなくてはならない。また、具体的状況において的確な判断を可能にする生きた知識でなくてはならない。単なる知識のための知識ではなく、現実の場面の諸問題の解決に向けて生きて働く、いわば実践と結びつくよ

うな知識でなければならない。

このような知識は知見と呼ばれるが、それは、明確な客観的知識でありながら、同時に実践的なものにかかわろうとする、いわば実践への方向を目指す知識であり、実践と密接にかかわる知識という性格を持つべきものであった。

3.2 プラトン

3.2.1 真理とその認識

プラトンは、「存在」と「生成」の両者をきびしく区別する。「アイデアの世界」と「現象の世界」という二元論につらなり、さらに感覚のはたらきと感覚によって把握されるものと、理性という心（魂）のはたらきと理性によってのみ把握されるものとをきびしく区別する。

「アイデア」は、宇宙（これは変化生成をたえずくり返し、われわれが感覚を通して把握している現実の世界）の手本、規範を意味する。さらに、究極の原因、真の実在といった意味をもっており、諸々のアイデアの中で最高のアイデアが「善のアイデア」であり、諸々のアイデアは「善のアイデア」に秩序づけられるとプラトンは言う。

プラトン著『国家』の中で、「善のアイデア」を天にある太陽に例えている。さらに「善のアイデア」をいかに認識するかという問題をめぐって、有名な二つの比喩「線分の比喩」と「洞窟の比喩」とを展開している。人間は現象界（生成界）に住む。人間の持つ魂は英知界（真の実在、永遠の世界）にあったもので、肉体の誕生とともに人間の体内に宿った。魂は英知界にもどることを願う。アイデアを求めてやまぬ魂の活動をエロス（恋）と言う。

プラトンは、学ぶということが知識を再把握することであるとして、想起を説明している（想起説）。すなわち、学ぶということは、人間の魂がかつて知っていたアイデア界の諸アイデアを想起する過程として考えることである。アイデアを想い起こす、認識するためには相当の知的な訓練が求められるとしている。

3.2.2 プラトンの倫理思想

プラトンは、人間には魂が宿ると考え、次の三つの部分からなるとした。頭に宿る理性的部分、胸に宿る気概（意志）的部分、腹に宿る欲望的部分である。そして、理性が、気概と欲望を制御するときに人間の魂は健全になると考えた。そして、魂の三部分に対して三つの徳を考えている。つまり、理性には知恵の徳、気概には勇気の徳、欲望には節制の徳を、そして、知恵の徳が、勇気と節制の徳を制御する関係になるときに、これらの徳は調和し、一体となり、その人には正義の徳が実現すると考えた。知恵、勇気、節制、正義の四つの徳はこの時代のギリシアにおける基本的な徳ということで、四元徳と呼んでいる。

すなわち、プラトンは人間の善さを心の正義として捉え、知恵、勇気、節制の各徳が優れていて、しかも全体の調和が保たれている状態、それは人間の本性に基づく心の満足が生まれると考えた。人間の善の基準は心の優れた働きとの調和にあって、そこに自ずから、心の満足を生じて人間は幸福に生きることができるのである。

そして、人間を導くものは、理性であった。すなわち、理性が人間の善を具体的に教え、幸福な生活へと導くのである。また、プラトンにおける理性は、宇宙全体を支配するものでもあった。善のアイデアがすべての真理と存在の源泉であるとすれば、それを宇宙全体に及ぼして支配するのが世界理性なのである。各人が自己の理性に導かれて幸福に生きようとするれば、それは宇宙全

体の生命に一致し調和することになる。

また、ポリスの生活も理性的なものでなければならず、正義の実現でなければならない。そこで、この個人の次元の考えを国家の次元として、欲望的部分に生産者（庶民）、気概的部分には軍人（戦士）、理性的部分には政治家という階級に当てている。各対応する徳をよく発揮するとき、国家は健全であり、正義の徳が実現され、正義の国家となる。人間は理性的であることによって、ポリス的であり、ポリスに正義を実現することによって、世界理性と一致し宇宙全体と協和し合うことができるのである。

プラトンにとって、政治的自覚を持つことによって始めて、人間の自己の本質を自覚し、人間として善く生きることができる。それがギリシア的な意味における自由人の生き方であった。理性は人間における神的な能力と見なされ、理性の故に人間は神に等しくなり得るものさえ考えられてきた。この根強いギリシア的な理性観の伝統を打破して、人間の有限性の自覚の上に立って、理性を有限なる人間の理性として捉えたのは、カント哲学であった。

3.3 アリストテレスの倫理思想

アリストテレスは、師のプラトンの現実から離れて存在するとされる善のアイデア論を否定し、倫理学の学問性を基礎づけようとした。

彼は、現実の世界からまったく超越した「アイデア」がすべてのものの原因であり、あるいはすべての学問の規範であるとは考えなかった。倫理学の目的は実践的学（知識）であり、その具体化は「実践」にあるとした。「徳とはなにか」「善とはなにか」といったように、本質を追求し知ることにはなく、有徳の人となり、善くなることに、倫理学の目的をみようとした。行為それ自体が倫理学の目的とされたのである。「善のアイデア」といった普遍的なものをたて、出発点とすべきでない、と考えたのである。

アリストテレスの有名な一句に、「人間はポリス的動物である」というのがある。人間は、ポリス的なものであり、各々がポリスにおいて他と生を共にすることを本性とするものである。したがって、彼はポリスの市民としての生き方を探求し、この探求が倫理学であり、また人間が善き人となるためにはポリスの国制が善きものでなければならない。この意味で倫理学は政治学と密接に結びつくばかりか、むしろポリスの学の一部をなすと考える。

ポリスの倫理は、私的生活の最高善であるのみならず、ポリスに属すべきものであった。人間をポリス的動物とみ、その倫理をポリス的人間の倫理学として体系づけた。

また、すべての行為の目指す目的は人間的な善であり、それ自体として選ばれる最高善は幸福であるとし、観想（テオリア）的生活、すなわち、真理探究の生活こそが最高の善にして幸福であるとしている。

徳または卓越性と幸福・善との関係をアリストテレスは、人間的な善とは人間の徳に即しての魂の活動である、また、幸福は完全なる徳に即しての活動である、と言っている。徳にかなった生活をしているからこそ、初めて善であり、幸福だと言っているのである。

彼は、魂のロゴス的な活動としての徳を「倫理的（性格的）優越性（正義、節制、勇気、寛厚などの個別的な徳）」と「知性的優越性（知恵・思慮・学・技術など）」の二つに分類している。倫理的優越性は、習慣から生まれてくる。善を単に心の内面に閉じ込めず内面的なものの外化として、社会のなかでの現実的な活動において捉えようとしていた。そして、この徳は「中庸」を

選択すべき状態をいう。ここから倫理的優越性のことを中庸の徳ともいう。

「中庸」は中国やインドの思想の中にもみられ、基本的には極端をさけるということである。超過も不足もしない状態であり、また価値的には最高のものである。中庸を選択させるのは人の理性である。

「倫理的優越性」の中では、特に正義こそ最重要の徳であり、他者に働きかけるゆえに完全な徳としている。正義は自分の行いに留まるだけでなく、他人に正義を及ぼすことができる、正義は最高善の行為が最高の徳の顕現となるから優れた徳なのである。ポリス、同胞のために幸福をもたらし得るのである。それ故に「人間はポリスの動物である」としたと解する。

このアリストテレスの主張は、大乘仏教が説く「自行」と「化他」にも通ずる論理である。人間には生きることにまつわる本能的なものから、自己実現の欲求に至るまでの種々の次元の欲求がある（マスローの「五段階欲求論」）。そのエネルギーが自らの幸福を追求する力となると同時に、かえって自己の生を縛る「我執」にも変じていく。生のエネルギーを無限に解き放つには、「利他」の実践にあることを、アリストテレスは、「人間はポリスの動物である」としたと考える。

また、彼は「人は皆幸福を目指す」と述べた。幸福の考え方には大別して三つあるとし、それらを、快楽を幸福、名誉を幸福、真理の探究（テオリア）を幸福というように分けた。そして、それぞれを享樂的生活、政治的生活、観想的生活と呼んだ。これらの三つの生活のうちで、即時的に望ましい活動こそが幸福であり、それは、快楽や名誉ではなく、観想的生活であると主張した。そして、幸福とは究極的な卓越性に即しての魂の或る活動であるとして、身体のアレテーではなく、魂のアレテーなのであり、幸福を魂の活動と解していると述べている。

倫理的優越性は欲望とか、感情を押さえて理性に従う徳であり、それは、ソクラテスのように徳は知識であると考えたのとは違って、自然的本能である欲求、衝動を実践的な知徳の指導の下に、練習によって、一種の習慣として獲得されるものであった。

プラトンにせよ、アリストテレスにせよ、あらゆるものが志向するものを「善」と考え、「善」をこのように目的と関連づけて、そこに人間の問題、ひいては倫理学の問題を考えようとする点では一致しているといつてよい。

また、アリストテレスが倫理学を政治学の一部門とみなし、プラトンが『国家』の中で「哲人王」の理想を説いているのも、目的としての善を、さらに人間の幸福との関連において捉えようとする、両者共通の問題意識によるものと考えられる。幸福の問題は、プラトンにとっても、アリストテレスにとっても、広い意味で政治の問題だからである。ただし、この善が、プラトンの場合、すべてのものの規範として普遍化され、さらにたとえば「善のイデア」という形で実体化し、その認識が学問の学問性の尺度とされている。

4. おわりに

西洋における学としての倫理学は、哲学と共に始まり、哲学を通して形成され洗練されていった。古代の倫理思想の古い表現は、はじめ神話や叙事詩などの中にも現れていたから、学としての倫理はミュートス（伝説、伝承）からロゴス（理性、論理）への発展という形成をたどって、その成立をみるに至った。倫理学が倫理的自覚として明確になるのが、ソフィストおよびソクラテスにおいてであった。

ソクラテスに始まる古代ギリシアの倫理はポリス中心の倫理であり、その社会状態を反映して、プラトンは、知恵、勇気、節制、正義の四元徳にまとめたが、特に中心をなすものは知恵と正義であった。

古代ギリシアの思想家の目は常に徳に向けられていた。徳とは人間の善美のことで、その善美を磨くことに生きることの意味を見出した。それは、最高善、すなわち「人間的な善」（他の諸目的を包括する究極的な善）であり、幸福の実現にはからならない。

一層人間らしい生活を築こうとしたのが古代ギリシア人であった。このように、人間的なものに向かって上昇し向上しようとする姿勢は、ヒューマニズム（人道主義）の欠かせない要件であり、それを目指していたと考察する。

【参考文献】

- 山川偉也著『古代ギリシアの思想』講談社学術文庫 1993
佐々木毅著『よみがえる古代思想』講談社 2003
寺崎峻輔、塩出彰共編『西洋倫理思想の展開』学術図書出版社 1987
小牧治編『倫理学』有信堂 1979
小熊勢記、川島秀一、深谷昭三編『西洋倫理思想の形成 I』晃洋書房 1985
尾渡達雄著『倫理学と道徳教育』以文社 1989
中野重伸著『ギリシア倫理思想』高文堂出版社 1997
岩田靖夫著『ギリシア哲学入門』ちくま新書 2011
ソポクレース著 呉茂一訳『アンティゴネー』岩波文庫 1961
ソポクレース著 福田恆存訳『オイディプス王・アンティゴネ』新潮文庫 1984
田中美知太郎著『ソフィスト』講談社学術文庫 1976
村井実著『ソクラテスの思想と教育』玉川大学出版部 1972
田中美知太郎著『ソクラテス』岩波新書 1957
プラトン著 久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫 1927
プラトン著 藤沢令夫訳『プロタゴラス』岩波文庫 1988
プラトン著 加来彰俊訳『ゴルギアス』岩波文庫 1967
プラトン著 藤沢令夫訳『メノン』岩波文庫 1994
プラトン著 藤沢令夫訳『国家 上下』岩波文庫 1979
プラトン著 田中美知太郎訳『テアイテトス』岩波文庫 1966
竹田青嗣著『プラトン入門』ちくま新書 1999
藤沢令夫著『プラトンの哲学』岩波新書 1998
アリストテレス著 高田三郎訳『ニコマコス倫理学 上下』岩波文庫 1971, 1973
山口善久著『アリストテレス入門』ちくま新書 2001
J.O. アームソン著 雨宮健訳『アリストテレス倫理学入門』2004